

大納言典侍についての一考察

郭 順 伊

はじめに

『平家物語』覚一本巻第五「奈良炎上」の章段において、南都大衆の叛乱を鎮圧するため大將軍として出陣した武將に清盛の五男重衡がいる。重衡は心ならずも東大寺、興福寺を焼失させてしまい、仏敵として罪深き人物となるに留まらず、その後一の谷合戦では乳母子後藤兵衛盛長に見捨てられ源氏方の生け捕りとなり、鎌倉・奈良と護送された後に斬首されるという、悲運な道を歩むことになる。『平家物語』が重衡について多く取り扱う記事は、覚一本では巻第九「重衡生捕」の章段で敵方の捕虜となつて以降、巻第十一「重衡被斬」で斬首となるまでの苦難の道のりが中心となり、重衡物語の特徴の一つに、重衡の周辺にいる女性達の存在がある。重衡の北の方大納言典侍、一の谷から京に連行された後、再会の叶った恋人の内裏女房、鎌倉に護送される途中、狩野介宗茂宅で重衡の身の回りを世話した千手前、以上の三人の女性達が重衡と深く関りのある人物として登場する。この三人の女性が重衡の死後、覚一本によつて皆出家の道を辿るという統一が見られる事を、服部幸造氏は「仏敵重衡に対する救い」として女性達が構成上要請されたと覚一本の女人往生を考察される中で述べられ、平野さつき氏は覚一本が図つた三人の女性の出家という類型的な行動を、「社会的自己」を放棄して祈つた女性たちの修行の功德が、亡き人に回向されてその罪を救うと

いうシステム」と指摘し、東大寺・興福寺の焼失という大罪を犯した重衡の救済のため三人の女性達を配し、それぞれに重衡の後世菩提を弔う役割を与えていると考えておられる。^(注3)

重衡と関りある三人の女性のうち内裏女房、千手前は『平家物語』が描く重衡物語の中に女性説話の一章段として取り上げられ、生け捕りとなった後、京から奈良へと護送される間の重衡との対面がそれぞれ描かれている。覚一本の内容に沿うと、かねてから交際のあった内裏女房と重衡は牛車の中で対面を果たすが、重衡は虜囚の身であるため周囲の目を憚り簾をかぶるように上半身だけを車中に入れ、内裏女房と顔を押し当て涙の対面を果たすのである。再会に対する両者の強い願いと対面の喜び、そして不自然な格好での再会は平家公達として華々しくあった重衡の衰微の様が見受けられ印象的な場面となっているだろう。生形貴重氏は、覚一本の重衡と内裏女房の対面に、読み本系古態本の屋代本では描かれていた「諸ノ女房」の忠告によって内裏女房が車から降りなかった内容が削除されている事を指摘し、「不必要な人物を省略し、覚一本は、対面の場を二人の最後の逢瀬として集約的な表現で盛り上げるのである。」と、重衡と内裏女房の二人のみを主軸に、対面の場面をより感動的に描こうとする覚一本の作意を読み取ろうとされた。^(注3) この対面以降、二人の再会は二度と叶わず重衡は処刑となるのであるが、『平家物語』内における内裏女房の描写は重衡との再会の場面を通して印象的な物語となっているだろう。次に登場する女性も千手前という、頼朝の指示により護送中の重衡を狩野介宗茂宅で世話した女房である。宴席で重衡と朗詠を唱和し、処刑から逃れる事のできない重衡が徐々に死へと近付く過程で、僅かな打ち解けた時間を与えてくれた女性であった。重衡は千手前の朗詠に感嘆し、千手前もまた重衡の朗詠の優雅さに思慕の念が湧き、僅かな時間を過ごしただけににもかかわらず重衡斬首を聞いて後は、その思いが募り出家をしてしまうのである。『吾妻鏡』には重衡への思慕の情が要因となり、千手前は病死したのではないかと人々が推測したとする記事も確認できる。^(注4) 重衡と深く関わりある女性の中で、以上の

二人は『平家物語』の中に重衡との対面を通して登場し、その他の場面には描かれない女性である。僅かな時間しか重衡と過ごす事ができなかったが、大罪を背負う重衡の救済という点で、彼女らはその後の一生を重衡のため仏道に捧げるといふ重要な役割を担っている事になる。重衡のため配された女性の中で内裏女房や千手前の物語は、重衡との対面や少ない時間を共に過ごした姿を通して、僅かな登場ではあるが両者ともに重衡と心を通わせた女性として際立った存在感があり、劇的な再会や運命的な出会いを通して内容の濃い、凝縮された物語に成立していると言えるだろう。

そして、重衡の物語に欠かせない女性として重衡北の方大納言典侍がいる。大納言典侍は前述した内裏女房や千手前に比べ、『平家物語』に頻繁にその名が登場する。重衡の妻として虜囚となった夫の身を案じる姿や、重衡と処刑前の最後の対面をする姿が描かれ、また一方では安徳天皇の乳母として、そして建礼門院徳子に近侍した女房として登場するのである。『平家物語』中に何度かその名が取り上げられる大納言典侍であるが、重衡と関り深い女性達の中では、内裏女房や千手前のように瞬間的に物語に登場し異彩を放つ女性ではないため、印象が希薄であるように思われる。佐々木八郎氏は「重衡と夫人の大納言佐殿との名残りを惜しんだ哀別の物語は、『内裏女房』（巻第十）の場合とは段違いである。」との指摘も^{（注）}されている。重衡と関わる三人の女性達の中で存在感が薄く、格別な特徴を有しているとも言い難い人物であるようだが、本稿ではその重衡北の方である大納言典侍に着目し、重衡の妻として、また安徳天皇の乳母であり、壇ノ浦合戦後、建礼門院に侍っていた女房として、二つの役割を担う大納言典侍像が物語上で如何に取り扱われているか、主に覚一本を用いながら諸本との比較を通して検討を行う事を目的とする。

(一)

重衡北の方大納言典侍の名が最初に記されるのは、重衡が一の谷で生け捕りとなつて後、帝が受け継ぐ三種の神器と重衡の身柄の交換を示した院宣を、屋島の一門に申し送りした際である。

【A】私の文はゆるされねば、人々のもとへも詞にてことづけ給ふ。北方大納言佐殿へも、御詞にて申されけり。「旅の空にても人はわれになぐさみ、我は人になぐさみ奉りしに、引別てのち、いかにかなしうおほすらん。「契は朽せぬ物」と申せば、後の世にはかならずむまれ逢奉らん」と泣くくことづけ給へば、重国も涙をおさへてたちけり。

(寛一本巻第十「内裏女房」)

ここでは、大納言典侍自身による言動が見られるのではなく、重衡の言動に即した内容に北の方の名と存在が浮上してくるのみである。重衡の側から妻への伝言を使い託したのであり、その言葉を受け取った大納言典侍の心情や様子などが語られる事はない。そして、院宣の受け入れを拒否する一門の評結に、

【B】北の方大納言佐殿は、只なくより外の事なくて、つやく御かへり事もし給はず。誠に御心のうち、さこそは思ひ給ふらめと、おしはかられて哀也。

(寛一本巻第十「請文」)

と、ようやく北の方の姿が描き出されるのであるが、三種の神器との交換に応じない決議に対して泣く以外に他はなく、重衡への返事も書く事ができない弱弱しい様子が短く語られている。重衡の母二位殿が僉議の場で倒れ伏し、「あの中将が京より言ひおこしたる事のむざんさよ。げにも心のうちにいかばかりの事を思ひ居たるらん。只われに思ひゆるして、内侍所を宮こへかへし入れ奉れ」

「(前略) 中将世になき物と聞かば、われも同みちにおもむかんと思ふ也。二たび物を思はぬさきに、たゞわれを

うしなひ給へ」

(同右)

と嘆き叫ぶ姿に比べると、妻の大納言典侍自身に目立つた言動は見られないのである。感情的に取り乱し、重衡の身柄と三種の神器との交換を請け入れるよう懇願するのは母親の二位殿であり、大納言典侍はただ涙に暮れ、重衡への返事も書く事ができないと言及されるのみである。子の助命を嘆願する悲痛な母二位殿の姿に注目が置かれ、妻である大納言典侍の胸中にまで踏み込んだ描写はここでも見ることができないであろう。次に大納言典侍の名が確認できるのは、またしても重衡の心情を綴る記事の中においてである。覚一本巻第十「海道下」では、捕われの身となり都を出てから既に春も暮れようとする日数を思い、「されば是はいかなる宿業のうたてさぞ」と重衡は我が身の置かれた状況に涙する。

【C】御子の一人もおはせぬ事を、母の二位殿もなげき、北方大納言佐殿も、本意なきことにして、よろづの神仏に祈申されけれ共、そのしるしなし。「かしこうぞなかりける。子だにあらましかば、いかに心ぐるしからむ」との給ひけるこそ、せめての事なれ。

(覚一本巻第十「海道下」)

と大納言典侍に触れた記事が確認できる。生け捕りとなり護送される我が身を重衡が振り返ったとき、北の方大納言典侍との間に所望する子供が誕生しなかった辛さも、今となつては子に対する名残や心苦しさを味わう事がなく「かしこうぞなかりける」と考える重衡の不憫な姿が見受けられるだろう。そして、【C】の場面も最初に挙げた引用文と同様に、大納言典侍の側に立ち入った記事でなく、重衡の側に即した重衡の立場に立つて語られる内容となっている。

これまで、三箇所にわたって物語中に確認できた大納言典侍に関する記事であるが、覚一本には大納言典侍の名が最初に出てくる【A】の場面の直後に、既述した重衡の恋人内裏女房との対面が描かれ、重衡が子の居ない事をせめ

ての事と感じる【C】の記事の後に千手前との章段が設けられている。大納言典侍に際立つた言動が見られない中で、内裏女房や千手前の物語の方が享受する側にとつて強烈な印象として残り、二人の女性の物語に挟まれた大納言典侍の存在が益々薄れてしまう点に繋がるだろう。ここまで見てきた大納言典侍は、たとえば重衡の言葉や心情の中だけで、また二位殿や内裏女房、千手前の姿に隠れて大納言典侍本人の様子や思惟がほとんど伝わってこない形式となっている。先に示した三箇所の場面を延慶本と比較してみると、大納言典侍の性質はほとんど変わらず大きな差異は見られないが、一点ほど覚一本と違う点に、大納言典侍が物語に最初に記される場面がある。

サテモ今度被打ヌル人々の北方、サマヲカヘテコキ墨染ニ成ツ、念仏申テ後生訪給ゾ糸惜キ。本三位中将重衡ノ北方、大納言亮殿計コソ、内ノ御乳母ナレバトテ、大臣殿制シ被申ケレバ、サマヲモヤツシ給ハザリケレ。

(延慶本第五本「平家ノ人々ノ頸共取懸ル事」)

一の谷合戦で討死した平家の人々の名を連ね、あても無く漂う船の有様や残された北の方達に触れる記事の中で、大納言典侍に言及した文辞が見られる。この記事は覚一本には見られず、延慶本は一の谷合戦の最後に大納言典侍という重衡北の方の存在と、同時に大納言典侍が安徳天皇の乳母である事を伝えている。一の谷合戦で重衡は生け捕りとなつたのであるから、他の妻達のように夫を亡くし出家した場合とは若干異なるのであるが、大納言典侍は安徳天皇の乳母という理由から出家を制止されたとある。大納言典侍についての記述はごく僅かで、悲運や嘆きをここでは記していないが、延慶本の記事からは一の谷合戦で不幸な境遇に置かれた女性として、重衡の妻であり、また安徳天皇の乳母であつた大納言典侍という女性が、物語に位置付けられている事を読む側に認識させるであらう。以上、ここまで取り上げた大納言典侍という人物は、幾度か重衡に関つて物語上に名は挙げられてきたのであるが、大納言典侍自身の言動はほとんど見られず、重衡の正妻でありながらその他の女性達の影に隠れた「静」の女性として扱われ

ていると考えられるだろう。

(11)

(二) で取り上げた【A】【B】【C】の記事は、大納言典侍の言動にほとんど触れておらず、如何なる女性であるか知り得るには情報が乏しく困難であった。その大納言典侍の心中が多く語られるのは、重衡と大納言典侍の再会の場面においてである。

本三位中将重衡卿は、狩野介宗茂にあづけられて、去年より伊豆国におはしけるを、南都の大衆、頻に申ければ、「さらばわたせ」とて、源三位入道頼政の孫、伊豆藏人大夫頼兼に仰て、遂に奈良へぞつかはしける。都へは入られずして、大津より山科どほりに醍醐路をへてゆけば、日野はちかゝりけり。此重衡卿の北方と申は、鳥飼の中納言惟実のむすめ、五條大納言国綱卿の養子、先帝の御めのと大納言佐殿とぞ申ける。三位中将、一谷でいけどりにせられ給ひし後も、先帝につきまいらせておはせしが、壇の浦にて海に入らせ給しかば、ものゝふのあらけなきにとらはれて、旧里にかへり、姉の大夫三位に同宿して、日野といふところにおはしけり。

(覚一本巻第十一「重衡被斬」)

大納言典侍は壇ノ浦合戦で平家が敗北となり、多くの平家一門の人々と共に囚われの身となった後、日野に住む姉大夫三位のもとで同宿しており、そこへ処刑前の重衡が訪れ再会が叶ったのである。重衡が処刑前に日野へ立ち寄り、北の方と再会したとする叙述は『愚管抄』にも確認できる。

大津ヨリ醍醐トヨリ、ヒツ川ヘイデ、宇治橋ワタリテ奈良ヘユキケルニ、重衡ハ、邦綱ガヲトムスメニ大納言

スケトテ、高倉院ニ候シガ安德天皇ノ御メノトナリシニムコトリタルガ、アネノ大夫三位ガ日野ト醍醐トノアハ
イニ家ツクリテ有リシニアイグシテ居タリケル、コノモトノ妻ノモトニ便路ヲヨロコビテヲリテ、只今死ナンス
ル身ニテ、ナク／＼小袖キカヘナドシテスギケルヲバ、頼兼モユルシテキセサセケリ。
(愚管抄 卷第五)

名波弘彰氏は『愚管抄』が記す重衡と大納言典侍の再会の記事から、慈円の歴史語りの方法を分析し、慈円と大納
言典侍やその姉大夫三位とが面識ある関係であつたろう事を指摘、重衡が処刑前に日野に住む大納言典侍のもとへ立
ち寄つたとする語りは、「情報源に彼女たちの〈女人語り〉を推測」しておられる。^(注7)『醍醐寺雜事記』にも大納言典侍
のもとへ重衡が立ち寄つた記事が見られ、重衡と北の方の再会は史実と考えられるであらう。^(注8)

覚一本の大納言典侍は、これまで重衡と関連する場面において具体的な言動は描かれず、大納言典侍の胸中を詳細
に窺い知る手段は乏しかったが、二人の再会譚においてこれまで自身によつて語られる事のなかつた想いが、大納言
典侍の口から次々と溢れるのである。重衡来訪の知らせを聞き終わらないうちに「いづらや、いづらや」と走り出て
くる大納言典侍には、逸る気持ちを抑えられず一刻も早く夫の姿を拝見したい心中が察せられ、そして大納言典侍と
の再会が叶つた重衡が、自身の額髪をくい切り、形見とするよう大納言典侍に託する様が覚一本には描かれている。

「(前略) 出家して、かたみにかみをもたてまつらばやと思へども、ゆるされなければ力及ばず」とて、ひたいの
かみをすこしひきわけて、口の及ぶところをくひきツて、「これをかたみに御らんぜよ」とて、たてまつり給ふ。

(覚一本 卷第十一「重衡被斬」)

延慶本では「(前略) 出家ヲモシタラバ、カタミニ髪ヲモ進セ候ベケレドモ、夫モユルサレヌゾ」トテ、袖ヲ顔ニ
押アテ給フ。」と、形見として髪のを渡す事のできない状況を重衡は嘆き、長門本や源平盛衰記も延慶本と同様の
内容を記している。自ら口でくい切り妻に髪のを残すという覚一本の描写を、尾崎勇氏は重衡の物語で極めて大き

な盛り上がりをおさめてゐる部分とし、「覚一本は劇的效果を配慮してこのような潤色をほどこしてゐるのではあるまいか」と述べておられる。死を目前に、妻に形見の髪の毛を残すという物語は、覚一本巻第二「大納言死去」にも見られる。平家討伐の謀叛により備前の児島へ流罪となつた新大納言成親は、成親のもとを訪れた信俊という侍に北の方への文を預け、その中に「御ぐしの一ふさ」を入れておいたのである。成親は信俊に対し、「我は近ううしなはれんずらむ。此世になき者と聞かば、相構て我後世とぶらへ」、「汝が又こんたびを、待つくべしとおおえぬぞ」など自らの死を悟る発言をしていた。

さてもあるべきならねば、信俊涙をおさへつゝ、都へ帰りのほりけり。北方に御ふみまいらせたりければ、是をあけて御覽するに、はや出家し給ひたるとおぼしくて、御ぐしの一ふさ、ふみの奥にありけるを、二目とも見給はず、「かたみこそ中く今はあたなれ」とて、臥しまろびてぞなけれける。おさなき人々も、声々になきかなしみ給ひけり。

(覚一本巻第二「大納言死去」)

成親北の方は形見としての頭髮を託された事により、夫の死を間近な現実として受け止める他なく、悲しみは一層増すばかりである。大納言典侍も、「これをかたみに御らんぜよ」と託された頭髮に、夫の死が免れぬ現実として確實に目の前にある事を思い知らされた瞬間であつただらう。これまでの辛く悲しい思いを重衡に訴えるよう語り出すのである。

「まことに別たてまつりし後は、越前三位のうへの様に、水の底にも沈むべかりしが、まさしうこの世におはせぬ人とも聞かざりしかば、もし不思議にて今一度かはらぬすがたを見もし、見えもやすると思ひてこそ、うきながらいままでもながらへてありつるに、けふを限りにておはせんずらんかなしさよ。いままでのびつるは、もしやと思ふたのみもありつる物を」とて、昔いまの事どもの給ひかはすにつけても、たゞ尽きせぬ物は涙也。

(寛一本 卷第十一「重衡被斬」)

「越前三位のうへ」とは、一谷合戦で討死した夫の後を追ひ、お腹に子を宿しながら入水自殺をした小宰相のことである。大納言典侍が小宰相のように命を絶たず、過酷な状況の中生き永らえてきた心の糧は、重衡ともう一度会えるかもしれない望みと、罪人であり虜囚の身である重衡がいつか赦免されるのではないかという期待であつた。しかし、ようやく再会の叶つた夫は処刑を控え憔悴しきり死が眼前にある夫である。小宰相のように死を考えた事、しかし、もう一度姿を拝見できるかもしれない望みが生きる支えとなつていた事、これまで語られなかつた大納言典侍の胸中が重衡と再会できた事により、涙と共に訴えられるのである。また、大納言典侍は『愚管抄』にも同内容が認められるように、粗末な衣を身に着けていた夫に、小袖と狩衣の着替えを勧めるのである。

「あまりに御すがたのしほれてさぶらふに、たてまつりかへよ」とて、あはせの小袖に浄衣を出されたりければ、三位中将これを着かえて、もと着給へる物どもをば、「形見に御らんぜよ」とて、をかれけり。北方「それもさる事にてさぶらへども、はかなき筆の跡こそ、ながき世のかた見にてさぶらへ」とて、御硯を出されたりければ、中将なくく一首の歌をぞかゝれける。

せきかねて泪のかゝるからころも後のかたみにぬぎぞかへぬる

女房、聞きもあへず、

ぬぎかふるころもいまはなにかせんけふをかぎりのかたみとおもへば (寛一本 卷第十一「重衡被斬」)

重衡は身に付けていた直垂も形見にするよう置き、大納言典侍はさらに、重衡の筆跡も形見として残そうと硯を出して互いに歌を交わすのである。延慶本、長門本、源平盛衰記にも重衡の衣の召し替えは記されるが、大納言典侍が重衡の筆跡を形見に残そうとする言動は描かず、重衡が小袖を着替えた後に、寛一本では大納言典侍の返歌となる「ぬ

ぎかふるころもいまはなにかせんけふをかぎりのかたみとおもへば」の歌を重衡が詠むのである。長門本は重衡の歌に對し、大納言典侍の返歌を「いかなれと契はくちぬ物といへは後の世までもわするへきかは」と設け、源平盛衰記も「憑おく契は朽ちぬ物といへば後の世までも忘べきかは」と、長門本の返歌と初句のみが相違する大納言典侍の返歌を用意し、覺一本の重衡の歌「せきかねて」の一首に該当する歌は詠まれないのである。そして、延慶本では重衡のみが「ぬぎかふる」の歌を詠み、對する北の方の返歌は描かれないため夫婦の唱和形式を成さない描写となつてゐる。延慶本は「ぬぎかふる」の歌を重衡が詠んだ後、重衡の練貫を「北方是ヲ取テ、最後ノ形見ト覺クテ、御カホニ押アテ、ゾモダヘコガレ給ケル」と記し、額髪や詠歌を形見として残す覺一本とは違い、延慶本では重衡の衣のみが唯一の形見となる。横井孝氏は、延慶本に描かれる大納言典侍の「肝心モ身ニソハヌ鉢ニゾミヘラレケル」、「臥マロビテ叫給フ」、「御簾ノキワニマロビテ出給テ、モダヘコガレ給フ」などの表現が、「重衡に返歌する余裕がないほどの嘆きに閉ざされているという描写に一貫性がある」とし、北の方の返歌を設けない延慶本以外の、夫婦の唱和形式で描く諸本には、「痛哭を見せる一方で、思い出の形見づくりに熱心な冷静な姿」の大納言典侍が見られると論じておられる。^(佐々)

覺一本では額髪、着用していた衣、書き残した歌と、より多くの重衡の形見を残そうとするのであるが、「ぬぎかふる」の歌を返した大納言典侍の心中に、重衡との永遠の別れを決定付ける今日を限りの形見だと思えば何の甲斐があるのかと、再会したからこそ味わう耐え難い別離の苦悩が推し量れる。「袖にすがって、「いかにや、いかに。しばし」とてひきとゞめ給ふ」、「御簾のきはちかく臥しまろび、おめきさけび給ふ御声」、「やがてはしりついてもおはしぬべくはおほしけれども、それもさすがなれば、ひきかづいてぞ臥し給ふ」と悲痛な嘆きに悶え苦しむ大納言典侍の姿も描かれるが、横井孝氏の指摘にある「思い出の形見づくりに熱心」な大納言典侍の姿は覺一本に顕著であろう。(一)

の【A】【B】【C】に見る大納言典侍は、重衡と関わりのあった他の女性達の影に隠れ、そして何よりも重衡と離れた場所に位置していた事で、大納言典侍の思惟が具体的に描き出される事はなく、存在感はほとんど希薄であった。処刑前によく重衡との再会を果たした大納言典侍は、重衡の訪問に急ぎ立つ姿や、死を考えた事、再会が叶ったからこそその別離の辛さを重衡に語り、より多くの形見を残すため夫に硯を勧める姿など、積極的な一面を窺い知る事のできる描写となっている。

重衡と別れた後、大納言典侍は斬首となった重衡の亡骸を、「かうべをこそはねられたりとも、むくろをばとりよせて孝養せん」と輿を遣わせ、放置されていた亡骸を引き取るのである。覚一本は「あつきころなれば、いつしかあらぬさま」になった夫の亡骸の前にする妻の心中を「をしはかれて哀也」と察し、「北方もさまをかへ、かの後世菩提をとぶらはれけるこそ哀なれ」と重衡と関連ある女性達と共通に、出家の道を歩み重衡の菩提を弔ったとしている。そして、重衡との別離から出家に至るまでの間、大納言典侍が重衡の亡骸と対面した後の行いを以下のように記している。

さてもあるべきならねば、其辺に法界寺といふ処にて、さるべき僧どもあまたかたらひて、孝養あり。頸をば、大仏のひじり、俊乗房にとかくの給へば、大衆にこうて日野へぞつかはしける。頸もむくろも煙になし、骨をば高野へをくり、墓をば日野にぞせられける。

(覚一本 卷第十一「重衡被斬」)

日野の法界寺にて然るべき僧達に依頼を申し供養を遂げ、骨は高野へ送り墓は日野に建てたとある。覚一本が描く重衡死後の大納言典侍による処理の行いは簡潔に記され、大納言典侍に対しても哀れであるとの感慨のみしか述べていない。ここでもまた、大納言典侍の嘆きや胸中を語る事はなく、そのため亡骸を引き取りに遣わせた大納言典侍は、重衡の死に接し非常に落ち着いた態度で、供養を含めた一連の過程を進行したかのような印象を受ける。延慶本の

納言典侍は重衡との別れの後、「クル、ホドニヲキ上テ、法戒寺ニ有ケル上人ヲ奉請テ、御グシヲロシ給テケリ。」と即刻出家をし、覚一本のように重衡の骸を北の方自身が引き取りに遣わせた記事はない。家臣が輿に担いで返つてきたところ、「北方車寄せニ走出テ、首モ無人ニ取付テ、音モ不惜、オメキ叫給フゾ無慚ナル」と、骸となつた夫にすがり泣き叫ぶ、あまりに残酷で不憫な妻の姿が描かれている。延慶本の大納言典侍と夫の亡骸を取り戻しに遣わせた覚一本の大納言典侍は対照的な描写にあるだろう。「かうべをこそはねられたりとも、むくろをばとりよせて孝養せん」と言う覚一本の大納言典侍の言葉には、無残な姿となつた重衡の骸を受け止める覚悟を感じるようでもある。覚一本が重衡の亡骸を前にした大納言典侍の嘆きや心中を描かず、重衡死後の処理を執り行う様子を簡素な記事に成立させている事から、大納言典侍の冷静な姿という一面を描こうとしているのではないかという点に留意しておきたい。

これまで確認してきた〈静〉の女性としての印象が強い【A】【B】【C】の描写は、重衡と大納言典侍が直接触れ合い会話を交わす事はなく、対面を果たせた二人の再会譚に至つてようやく大納言典侍の思いが語られる形式となっている。覚一本で窺い知れた再会譚の大納言典侍の姿は、これまで印象が薄かつた大納言典侍に比べ、重衡との会話や形見を求める姿に積極性や冷静な態度も見受けられるだろう。重衡との再会場面に大納言典侍の重衡に対する心中が集約して描かれ、また他本に比べより多くの形見を残そうとする姿に、返歌を詠む余裕もなく泣き崩れる延慶本の大納言典侍とは違つた、冷静な心理状態で重衡の生きていた証を残そうと積極的に行動する大納言典侍の姿が見られるのである。

(三)

次に重衡北の方として位置する大納言典侍と、もう一つの側面である安德天皇の乳母であり建礼門院に近侍していた女房として描かれる大納言典侍を見ていきたい。重衡の妻という枠ではなく、覚一本に平氏一門の女房として描かれる大納言典侍の姿で、非常に印象に残るのが壇ノ浦合戦の大納言典侍の行動である。源平最終決戦となった壇ノ浦合戦は、平家の敗色が濃くなる戦々恐々とした状況で、幼い安德天皇と安德天皇の祖母二位尼が入水をしてしまう。上横手雅敬氏は安德天皇や二位尼、そして安德天皇の母建礼門院の御座する船「御所の御舟」には女性ばかりがおり、その場所で天皇の入水という「最後の修羅場が展開され」たと述べておられる。その最も壮絶なる「御所の御舟」には安德天皇の乳母であった大納言典侍も仕えていた様子が延慶本に記され、

是ヲ見奉給テ、国母建礼門院ヲ始奉テ、先帝ノ御乳母帥典侍、侍大納言典侍以下ノ女房達、声ヲ調テラメキ叫給ケレバ、軍ヨバヒニモ不劣ケリ。
(延慶本第六本「壇浦合戦事付平家滅事」)

と安德天皇と二位尼の入水直後の衝撃や嘆きを、安德天皇の乳母である大納言典侍の名を挙げ記している。その渦中に覚一本は次のような大納言典侍の行動を描いている。

大納言の佐どのは、内侍所の御からうとを持つて、海へ入らんとし給ひけるが、はかまのすそをふなばたに射つけられ、けまとゐてたふれ給たりけるを、つはものどもとりとゑめたてまつる。(覚一本巻第十一「能登殿最期」)
次々と押し寄せる源氏の襲来に女房達は悲しみに暮れる間も無く、誰もが取り乱し混乱状態に陥っていた状況であるが、大納言典侍は帝の象徴である三種の神器の一つ内侍所を入れた櫃を敵に渡すまいと、自ら抱えて海に飛び込もうとしたのである。永井路子氏はこの大納言典侍の行動を、「なかなか落ちついた働きぶり」と見ており、続けて、

自分の不幸を泣くよりほか何もしなかったように見える彼女は、最後に及んで氣を取り直し、天皇に次ぐ大切なものを、わが手によって処分しようという悲壮な覺悟をしたのである。

と大納言典侍の行動を解しておられる。ここで取り上げた壇ノ浦の場面は、(一)で取り上げた【A】【B】【C】の次に大納言典侍が登場する場面であり、重衡との再会譚の前に設けられている章段である。先ほども述べた事であるが、【A】【B】【C】の箇所は大納言典侍の印象が非常に希薄な場面であった。再会譚における重衡とのやり取りから、これまで乏しかった大納言典侍の言動や胸中が明確となるが、【A】【B】【C】三場面の〈静〉の女性として物語上に位置していた印象とは、随分相違する大納言典侍の姿が覚一本の壇ノ浦合戦に描かれているだろう。これまでは影の女性として存在感が非常に薄い人物であったが、壇ノ浦合戦の場面に行動的な〈動〉の女性としての姿を見せるのである。結局、船端に袴の裾を射とめられ、内侍所も敵に奪われてしまうのだが、〈静〉の女性として見てきた姿と対照的な大納言典侍の行動的な面が見られるだろう。せめて内侍所だけでも渡さぬと命を張って海に飛び込もうとし、しかしながら射とめられた裾に足が絡まり源氏の武者たちによって取り押さえられてしまうのである。大納言典侍の無念さが伝わってくるような場面であり、壇ノ浦で見せる行動は凄まじい戦況において大納言典侍の〈動〉の部分が描出され、軟弱な重衡北の方の印象とは異にする安徳天皇の乳母として自身の役目を果たそうとした必死な姿が伝わってくるであろう。そして、覚一本の壇ノ浦合戦に見られる大納言典侍の積極的な行動は、(二)で述べた重衡との再会でより多くの形見を残そうとした姿や、重衡の亡骸を引き取りに遣わせた冷静で行動的な面と重なるのである。

大納言典侍が内侍所を守り海に飛び込もうとした姿は延慶本には描かれておらず、類似する内容として、大納言典侍と同じく安徳天皇の乳母であった帥典侍という女房が海に飛び込み、袴の裾を船端に射つけられ引き上げられたと

の記事がある。延慶本には覺一本が語る、壇ノ浦での大納言典侍の行動は描かれず、〈動〉の女性として行動的な姿は覺一本に顯著であると言えるだろう。壇ノ浦での大納言典侍の振る舞いは入水をした安徳天皇の乳母として、また平家一門に属する女房として三種の神器を守ろうとする気迫も感じるようである。(一)(二)で追ってきた重衡との関連場面に登場する大納言典侍は、重衡北の方として愛する者との別離に苦しむ姿が中心に描かれてきたが、覺一本の壇ノ浦合戦の行動を含め、安徳天皇の乳母である平家一門の女房として描かれた大納言典侍の姿がある。その様子を以下に見ていきたい。

壇ノ浦合戦が終結し、平宗盛や建礼門院をはじめ多くの公卿や女房達が源氏の生け捕りとなり、その中に「女房には、女院・北の政所・廊の御方・大納言佐殿・帥のすけ殿・治部卿局已下四十三人とぞ聞えし」(覺一本卷第十一「内侍所都入」と大納言典侍の名も確認できる。生け捕りとなつた平家の者達は義経の護送で帰洛する途中、明石の浦で自らの境遇を月に託し和歌を詠むのである。

帥のすけ殿、つくぐ月をながめ給ひ、いと思ひ残す事もおはせざりければ、涙にとこもうくばかりにて、かうぞ思ひつゞけ給ふ。

ながむればぬるゝたもとにやどりけり月よ雲井のものがたりせよ

雲のうへに見しにかはらぬ月かげのすむにつけてものぞかなしき

大納言佐殿、

我身こそあかしの浦にたびねせめおなじ浪にもやどる月かな

「さこそ物がなしう、昔恋しうもおはしけめ」と、半官物のふなれどもなさけあるおのこなれば、身にしみてあはれにぞ思はれける。

(覺一本卷第十一「内侍所都入」)

一門の敗北と囚われの身と言う悲惨な境涯に置かれた女房達の中から、「帥のすけ」と大納言典侍の二人が自らの過酷な状況を歌に詠む。「帥のすけ」は、先述した延慶本に見られる壇ノ浦合戦の描写で、海に飛び込み袴の裾を船端に射つけられた女房「帥典侍」であり、大納言典侍と同じく安徳天皇の乳母であつた人物である。壇ノ浦の戦場を経験し、幼い安徳天皇と二位尼の入水という衝撃を眼前にした女房達の、一族の支柱を失つた喪失感や絶望感はいふまでもないだろう。亡くなった安徳天皇の乳母であつた帥典侍と大納言典侍の歌が詠まれ、その様態は変わりてた我が身を悲観し、支えを失つた女房らの代弁者として位置付けられているようである。

二者の詠歌に続けて覚一本は女房達に対する義経の感慨を記し、明石の浦での場面を締め括っているのだが、延慶本は続けて、囚われの身となつた他の女房達の心情に触れた描写を綴っている。延慶本は明石の浦の詠歌に続けて、太宰権帥に左遷となつた菅原道具の歌「名ニシホフ明石ノ浦ノ月ナレド都ヨリ猶クモル袖カナ」を取り上げ、菅原道具の境遇と女房ら自らの境遇とを比較した記事を設けている。

サレドモソレハ御身一ノ恨ナリ。此ハサシモムツマジカリシ人々ハ、底ノミクヅト成ハテヌ。故郷ヘ帰リタリトテモ、空キ跡ノミ涙ニ咽ム事モ心憂。只コ、ニテイカニモナリナバヤトゾ思食ケル。

（延慶本第六本「安徳天皇事付生虜共京上事」）

これらの記事に類似する表現は長門本や源平盛衰記にも見られるが、延慶本はさらに続けて女房達に関する独自の記事を設けている。

実ニ物ヲ不思シテ都ヘ上ランソラ、海上ノ旅、船ノ内ノスマヒハ物ウカルベシ。魚舟ノ火ノ影ヲ燈ニタノミ、玉ノ台トスマヒシ海人苦屋モスミマウク、渚ヲ洗フ浪ノ音モ、折カラ殊ニ哀也。都モ近クナルマ、ニ、ウカリシ波ノ上ノ古里、雲居ノヨソニナリハテ、ソコハカトモミヘワカズ。新中納言ノ今ワノ時、タワブレテ宣シ事サヘ

思出ラレテ、悲カラスト云事ナシ。サルマ、ニハ無甲斐御涙ノミ、ツキセザリケリ。

(同右)

岡田三津子氏は延慶本の独自文から、「義経に護送され壇ノ浦からの旅を続けてきた一門の女房たちが、帰洛後の生活に大きな不安を抱く様を際立たせている。」と指摘し、「延慶本では、他の『平家物語』諸本には見えない独自文によって、壇ノ浦合戦後の女性たちの姿を一つの枠組として物語の背景に位置付けている。」との見解を示しておられる。^(注12) 帥典侍と大納言典侍の歌を記した後に、その他の女房達の心情や境涯に触れる事で、延慶本は生け捕りとなつた女房らの現実を、より強調して描き出そうとしている。覚一本は帥典侍と大納言典侍の二人のみを描き、その他の女房達の不遇について記す事はないが、しかし、多く囚われの身となつた女房達らの心情を、帥典侍と大納言典侍が代表となり月に仮託し歌を詠む姿と捉えられるだろう。岡田三津子氏は続けて延慶本「重衡卿北方事」の章段にも記される他の女房達に触れた記事を取り上げ、延慶本は零落した平家一門の女房達について、「壇ノ浦合戦後の女性たちの姿を一つの枠組として物語の背景に位置付けている」と述べておられる。延慶本に生け捕りとなつた女房達の姿が顯著に描き出されるという指摘は、先に(一)で取り上げた、延慶本に大納言典侍が最初に描かれた「平家ノ人々ノ頸共取懸ル事」にも共通性があるように思われる。一の谷合戦で討死した平家一門の北の方達に触れ、残された妻らの衰微の様を記すと同時に、大納言典侍について言及した記述で場面を締め括っていた。残された女房達の不遇を延慶本が描く時、そこに大納言典侍に言及した記事も確認できるのである。延慶本が意図的に大納言典侍と残された女房らの記事を組み合わせているとは断言できないが、享受者の印象として重衡北の方である大納言典侍が、また一方で安徳天皇の乳母という立場から、過酷な状況に追い込まれて行く平家一門女房らの中で最も象徴的な人物として捉えられるのではないだろうか。覚一本は延慶本のように、大納言典侍の描写と並べて他の女房らの様態を描く事はしていないが、壇ノ浦合戦の船中で内侍所を抱え海に飛び込もうとした姿に、安徳天皇の乳母として平家一門の女房

として際立った行動が見られ、多くの女房らの中でも一際目立つ存在にある。その大納言典侍が我が身の不運を詠む姿に、覚一本にも生け捕りとなつた女性達の嘆きを代弁する女房としての大納言典侍の姿が見られるであろう。

おわりに

重衡亡き後、大納言典侍は覚一本灌頂巻に大原で建礼門院に近侍する女房として、また建礼門院の最期を見届けた女房として物語に配されている。

かくて神無月中の五日の暮がたに、庭に散しく櫛の葉を踏みならして聞えければ、女院、「世をいとふ所に、なにももののとひくるやらん。あれ見よや。忍ぶべきものならば、急ぎしのばん」とて見せらるゝに、をしかのとをるにてぞ有ける。女院、「いかに」と御尋あれば、大納言佐殿、なみだをおさへて、

岩根ふみたれかはとはんならの葉のそよぐはしかのわたるなりけり

女院哀におほしめし、窓の小障子に、この歌をあそばしとゞめさせたまひけり。

(覚一本灌頂巻「大原入」)

また、建礼門院を訪ねた後白河法皇の大原御幸では、

「花がたみひちにつかけ、岩つゝ、じとり具してもたせ給ひたるは、女院にてわたらせ給ひさぶらふなり。爪木に藤折具してさぶらふは、鳥飼の中納言維実のむすめ、五条大納言国綱卿の養子、先帝の御めのと大納言佐」

(覚一本灌頂巻「大原御幸」)

と、建礼門院と共に山を下りてくる大納言典侍の姿が描かれる。壇ノ浦合戦後、処刑となつた重衡を弔い、その後大原で建礼門院に仕えていた大納言典侍は、明石の浦でも見せたように安徳天皇の乳母という平家一門の女房らを代表

する人物として、建礼門院に近侍し女院の最期を見届け自らも往生を遂げる様が描かれている。

かくて年月を過ごさせたまふ程に、女院御心ち例ならずわたらせ給ひしかば、中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ、「南無西方極樂世界、教主弥陀如来、かならず引撰し給へ」とて、御念仏ありしかば、大納言佐の局、阿波内侍左右に候て、いまをかぎりのかなしさに、こゑもおしまずなきさげぶ。御念仏のこゑ、やうくよはらせましくければ、西に紫雲たなびき、異香室にみち、音楽そらに聞ゆ。かぎりある御事なれば、建久二年きささるぎの中旬に、一期遂におはらせ給ひぬ。きさいの宮の御位より、かた時もはなれまいらせずして候はれ給しかば、御臨終の御時、別路にまよひしも、やるかたなくぞおぼえける。此女房達は、むかしの草のゆかりもかれはてて、よるかたもなき身なれ共、おりくくの御仏事営給ふぞあはれなる。遂に彼人々は童女が正覺の跡を追ひ、韋提希夫人の如に、みな往生の素懷をとげけるとぞ聞えし。

(覺一本灌頂卷「女院死去」)

建礼門院の終焉と、続けて大納言典侍ら女院に仕えた女房の最期が描かれ、大納言典侍が往生の素懷を遂げたのは、建礼門院の最期を見届け女院の仏事を営んだ事によると解される。服部幸造氏は、

覺一本は女院の周囲に二人の女を配し、彼女ら二人が女院の仏事を営んだことによつてこれも往生したと説く。女院の往生は一層確實なものとなり、畜生道に墮ちた平家一門も又救われたのである。

と、大納言典侍の往生は建礼門院に仕えた事により遂げられたと論じておられる。^(後注)大納言典侍と建礼門院を繋ぐ重要な人物は安徳天皇であり、大納言典侍が建礼門院に近侍したのも安徳天皇の乳母という立場にあったからだと考えられる。大納言典侍の最期は重衡北の方としてではなく、安徳天皇の乳母であり建礼門院に仕えていた女房として往生の素懷を遂げたと記されるのである。

以上、重衡の北の方であり安徳天皇の乳母であつた大納言典侍について見てきた。大納言典侍は最終的に往生の素

懷を遂げたと物語に記され、建礼門院と共に安德天皇と一門の菩提を弔った女房として『平家物語』に位置している。壇ノ浦の敗戦や生け捕りとなった帰洛の途上、そして建礼門院の終焉の時、重要な場面で大納言典侍は平家一門の多くの女房達の代表者のようにその姿を捉える事ができるだろう。そして、また別の側面として重衡の妻である一個人としての大納言典侍が描かれる。全体を通して、大納言典侍の心情や言動が克明に窺えるのは、重衡との再会・別離の場面と言えるだろう。重衡の妻として大納言典侍を描く時、それは一個人の重衡北の方として存在する一人の女性として置かれ、そして安德天皇の乳母であり建礼門院に仕えた女房としての大納言典侍には、平家一門の女房らを代表する象徴としての役目が与えられているようである。重衡の妻という個人と、多くを代表する女房という二つの面を抱える大納言典侍が、妻としての物語と女房としての物語、それぞれの役目を集約した大納言典侍の二つの物語が成立しているのである。

〈注〉

- (1) 服部幸造氏「覚一本『平家物語』における女院往生」(『国語国文学』第二十二号、一九八二年二月)。
- (2) 平野さつき氏「愛別離告を越えて——『平家物語』における女性と仏教——」(『国文学解釈と鑑賞』第五十六巻五号、一九九一年五月)。
- (3) 生形貴重氏「愛別離苦と『平家物語』の語り——覚一本『平家物語』の表現をめぐって——」(『日本文学』第三十五巻一号、一九八六年一月)。
- (4) 「今晩千手前卒去す。年廿四。その性はなほだ穩便にして、人々の惜しむところなり。前故三位中将重衡参向の時、不慮に相馴れ、かの上洛の後、戀慕の思ひ朝夕休まず。憶念の積るところ、もし發病の困たるかの由、人これを疑ふと云々。」「吾妻鏡」文治四年四月廿五日条。(貴志正造氏訳注『全譯吾妻鏡』新人物往来社、一九七六年)。
- (5) 佐々木八郎氏『平家物語評講下』(明治書院、一九六三年八月)。

(6) 本文の引用は以下のテキストを使用した。

○覚一本…『新日本古典文学大系 平家物語』(岩波書店)。○延慶本…『延慶本平家物語』(勉誠社)。○長門本…『長門本平家物語の総合研究』(勉誠社)。○源平盛衰記…『源平盛衰記上下』(芸林舎)。

(7) 名波弘彰氏「重衡物語の内と外(上)」(『文藝言語研究・文藝篇』第三十九卷、二〇〇一年三月)。

(8) 「中将妻御前者五條大納言邦綱女也。借改延行寺主住房此月來所被住也。爲相逢中将自西辻還而被入彼房。見物之物哀歎之。」(『醍醐寺雜事記』上之下)。

(9) 尾崎勇氏「平重衡と女性たち(下)」(『防衛大学校紀要』第四十二輯、一九八一年三月)。

(10) 横井孝氏「重衡物語の輪郭——延慶本平家物語の語りと本文——」(『古文学の流域』新典社、一九九六年四月)。

(11) 上横手雅敬氏「壇之浦合戦と女人たち」(『赤間神宮叢書』十三、源平シンポジウム委員会、二〇〇二年四月)。

(12) 永井路子氏「平家物語の女性たち」文春文庫(文藝春秋、一九七九年二月。初出『平家物語の女性たち』新塔社、一九七二年七月)。

(13) 岡田三津子氏「建礼門院と八条院の周辺——女性たちの世界——」(『平家物語主題・構想・表現』汲古書院、一九九八年十月)。

(14) 注(13)に同じ。

(15) 注(1)に同じ。